

私たちは、ふだん何気なく「自立」という言葉を使ったり、「自立」という気持をもちながら人に接しているが、その言葉が時には拒否的な様相をおびていることにあまり気づいてはいない。

以前、非常勤の講師をしていたある看護学校での話である。控室で講義の合間に休けいしていると、先の時限の講義を体調が悪いと休んでしまった学生が、不安な顔をしてやってきた。応対に出た教務担当の教員に欠席した理由を話し、以前にも一度休んだことがあるので単位取得のための要件を満たすことができるか否かについて、相変わらず不安な面持で尋ねていた。

その表情から、彼女がいい加減な気持から欠席したわけではないことがみてとれた。こちらから、「まだ大丈夫だよ。安心して次の講義を受けなさい」と声をかけようと思った時に、応対していた先ほどの教員が「あなたが欠席しようと、単位が取れなくなろうと、私は困らないのよ!」と強い調子で言い放ったのである。学生は無言のままその場を去り、私は信じられない気持で、またこの状況をどのように理解したらよいかわからず、しばし茫然としてしまった。そのような対応の仕方があることを以前から聞いてはいたが、目のあたりにしたのは初めてであった。

率直に言わせてもらえば、私が大学院の学生のころからかわってきたいくつかの看護学校の先生方の中には、学生に対してこのようなかわり方をする人が少なからずいた。それは他

の社会とは異なった独特のかかわり方のように思えるのだが……。そして、そのようなかわり方は学生からは当然「冷たい」と受けとられ、さらに「いつも人間看護などといいながら、私たちの人格をいっさい認めない」という不信感を芽生えさせる一因となっている。青年期の、本来意気揚々と学生生活を送り、またアイデンティティの模索のためにも充実した日々を送ることが要求される学生にとって、この始めの一步のつまずきは、看護職そのものの不信感を形成しかねないようにも思われる。

おそらく先の教員は、「看護は厳しいもの。生半可な気持では勤まらないし、少しぐらい体調が悪くとも役割を果たす意気込みが必要。私にたよらず、自分ですべてを決めていかねば……」と「自立」を促したのかもしれない。その意味では、ひとつの愛情の表現であったのかもしれない。しかしながら、いくら「愛」だと言ってみたとところで、それが伝わらなくては、それは無いに等しいのではなからうか。

私たちは、自立という言葉強調しすぎではないだろうか。そして、自立を人に強調する時に相手に対して、どこか拒否的にはなっていないだろうか。自立という言葉を知らず知らずに拒否的に使うよりは、人と人との、お互いにとのようにかかわり合って、強く依存し合っているかという現実気づくことの方が、重要なことなのではないだろうか。

自立という言葉、人間の存在のあり方から、もう一度見直す必要がある。